

宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319
FAX (0198) 31-2320

やっとそこに着いてファゼーロが立ちどまったときは あたりはもうすっかり夜になってゐて樺の木もまっ黒にそらにすかし出されてゐました。

つめくさの花はちやうどその反対に明るくまるで本統の石英ランプでできてるやうでした。

〔「ポラーノの広場」より抜粋〕

霧のジェリーを探すとき

独立研究者・編集者 岡田基生



宮沢賢治は遠い昔の作家だ。だが、その声は年老いることがない。なぜなら、変わらず私たちに語りかけ、現代の生活においても響き渡る意味を作品のうちに残しているからだ。

7月初旬、花巻東高校で宮沢賢治の課外授業を行う機会に恵まれた。今の10代の若者たちにも、自分の日常と彼の作品が繋がっていることを感じてほしい。そう考えた私は、「物質的な貧しさと心の貧しさ」という二つの貧困の課題に生涯をかけて取り組んだ人物としての

宮沢賢治について話すことにした。「物質的な貧しさ」は賢治の時代と比べると軽減されたが、「心の貧しさ」は現代でも依然として大きな課題だ。それを解消するヒントを、作家の人生と作品から発見できないだろうか。

授業中、花巻に暮らす高校生たちがとりわけ興味を示したのは「ダイエット」と「スマホ依存」の事例だった。食べ過ぎることはしばしば精神的な不満足に由来する。心のすきまを物質で満たそうとしてしまうのだ。高揚感やワクワク感を求め、また余計なお菓子を食べてしまう。

スマホ依存も実はこれに似ている。「アテンション・エコノミー（関心経済）」と呼ばれる現代の社会。私たちがWEBページを見たり、アプリを使用したりするときの「関心」自体が、例えば広告収入

につながる価値を持ち、市場で取引される。だからスマホのサービスやコンテンツは、できるだけ長時間、高頻度、私たちがそれに触れたいくなるように巧妙に設計されている。

もちろん、お菓子もスマホも直ちに悪ではない。それらは私たちの人生を豊かにする力を持っている。しかし、まったく何も考えずに食べ続けたり、使い続けたりしていると、私たちはだんだんと「ただ何となくそうすること」に支配されていく。そうすると、消費すればするほど「豊かさ」から遠ざかってしまうのだ。

私自身、慌ただしい都市生活の中でスマホにもお菓子にも浸っていたが、どこか満ち足りなさやつまらなさを覚えてもいた。そんなときに、ふと宮沢賢治の全集をひも解く。すると、他ではあまり感じられない豊かな味わいが広がっていく。私がとりわけ愛好しているのは、「春と修羅 第二集」収録の心象スケッチ「山の晨明に関する童話風の構想」。岩手県北上山地の早池峰山に登る賢治の心象風景が描かれている作品だ。「つめたいゼラチンの霧もあるし／桃いろに燃える電気菓子もある／またはひまつの緑茶をつけたカステラや／なめらかでやにっこい緑や茶いろの蛇紋岩」というフレーズから始まる詩は、早池峰山を「巨きな菓子の塔」として描き出す。そして、グリムやアンデルセンを読み終わったら自分の足でこの塔に登ろう、とイーハトーボのこどもたちに誘いかける。

呼びかけられたような気がして、花巻での課外授業の翌日、さっそく早池峰山に登った。登山口から歩いていくと、三十分もしないうちに森林限界に達し、突如として視界が開ける。見渡す限り、岩場、低木、草花だけが広がる。そこから向かう先は、濃密な霧に包まれてちっとも見通すことができない。夏にも関わらず、冷たい風が吹きすさび、上着を羽織ってもなお凍えるような寒さに全身が震える。前に進むのにも手こずりながら、私は「つめたいゼラチンの霧」を堪能していた。いや、霧を味わうというよりも、むしろ自分自身が「つめたく濃い霧のジェリー」の一部になって揺れている。東京では本を開いて言葉で味わっている詩の世界を、ようやく全身で感じている。自分自身が詩の一部となっているかのような。そんな瞬間を繰り返しながら、私は蛇紋岩の斜面をよじ登っていった。

賢治は早池峰山を「巨きな菓子の塔」と見立てた。幻想的な言葉づかいだが、彼は現実とは異なる夢の世界へと逃避していったのではない。そのように見立てることで、現実の解像度を高め、より深く感じようとしているのではないか。カフェでジェリーを注文して食べるのと、ここで天上のジェリーを食べるのとでは、なぜこれほど味わいの豊かさが違うのだろうか。私は、「農民芸術概論綱要」を思い出した。その中で賢治は、芸術家が独占している美は不要だという。「ここにはわれら不断の潔く楽しい創造がある／都人よ 来てわれらに交れ」と呼びかけ、自分たちで新たな美を創ることを説いたのだ。ただ受動的に味わうのではなく、能動的に迫っていき味わうこと。視界に立ち込める霧を「天上のジェリー」として味わうことは、楽しい創造の世界に入っていくことだ。世界を創造的に味わうこと。その経験のうちには、スマホやお菓子への依存にはない奥深さがあり、楽しさがある。

賢治にとって「楽しい」という言葉は、実は「さいわい」という言葉と同じくらい重要な意味を持っていたのではないかと私は考えている。「イーハトヴ」という名前で体験される岩手は、「まことにあやしくも楽しい国土」（『注文の多い料理店』広告文）になる。宮沢清六宛の書簡で「もし風や光のなかに自分を忘れ世界がじぶんの庭になり、あるいは惚として銀河系全体をひとりのじぶんだと感ずるときはたのしいことではありませんか」と語ったこともある。賢治のなかに秘められた、世界をどこまでも深く楽しんでいく力。それを明確に捉え、私たちの誰しものが生活の中で発揮できるようになるための方法を、私は戻ってきた東京で探している。



賢治先生と朗読旅

朗読家 岡安圭子



一台の8ミリフィルムカメラが、遠くに見える山の峰を捉えます。山間には谷があって、そこへぐぐっとカメラが近づいていくと、小さく細く流れる小川が見えます。カメラは小川に近づき、その水面から、ちゃぽんと水中に潜ります。浅い川の底には、おそらく赤ちゃんの握り拳くらいの沢蟹が二匹いるのが見えます。どうやらまだ子供らしい、小さな蟹の兄弟が、人間には聞き取れないようなごく小さい声でなにやら話をしています。そしてその小さな口元から、更に小さな小さな泡がつつぶとカメラに流れてきて……。

『やまなし』の冒頭は、こんな小さな小さなシーンが丁寧に描かれています。その“とてつもない小さな世界観”が、声にするたび私を魅了し、愛おしさが溢れました。

主催している朗読教室で、これまで宮沢賢治先生の作品を数多くご紹介してきました。ご参加くださる方にはこの愛おしさを味わってもらおうべく、遅かれ早かれどこかのタイミングで『やまなし』をご案内するようにしています。

朗読の活動は2007年より、そして朗読教室は遅れて2015年より始めました。最初は賢治先生だけではなく、いろんな文学者の作品をテキストに選んでいました。そこへ2020年春、得体の知れない新型コロナウイルスが急速に広まり、学校が休校になり、日常が日常でなくなってしまったその時に、オンライン教室を始めようと思いました。その最初のテキストに選んだのは『銀河鉄道の夜』でした。当時、WEBへアップしたご案内文を転記します。

ほんの数週間前は、何も意識せずに「日常」を送っていました。

生きることも、働くことも、人と話すことも当たり前のようにそこにあって、それが分断される時が来るなんて想像もしていませんでした。

2020年2月と3月に予定していた朗読教室は、それでもまだその時点では迷った末に中止しました。緊急事態宣言が発令されている今になってみ

ると、それは必然の選択だったと思います。

それまで、朗読教室のご案内をお送りする際には下記のような文章を添えていました。

「朗読＝ただ本を読む」ことは、意外と難しいことに気づきます。文字を音や静けさに変えていくシンプルな作業は、シンプルが故に素の自分と向き合うことになるからです。けれど、読むことに集中し我を忘れた瞬間はとても心地よいものです。日常と離れた音の空間を作ってみませんか。」

この文中に出てくる「日常」は、現代社会で伴うストレスや煩雑な事などを想定していましたが、その同じ「日常」がいかに尊く重みを持ったものであったか改めて気付かされる毎日です。

「日常」と離れないために。「日常」へ戻る音の空間を作ろうと思います。

この度、Zoomを使用したオンライン朗読教室を開始いたします。テキストは宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』です。一つの物語をみんなで順番に朗読し、録音し、youtubeへ配信していきます。みんなで作る朗読リレー『銀河鉄道の夜』です。

銀河鉄道の長い朗読旅が終わる頃、世界はどのように変化しているのでしょうか。ゆっくりと、世界の濁りを濾過しながら、光る海原を目指していこうと思います。

朗読リレー『銀河鉄道の夜』はその年の秋にラストを迎えましたが、ご存知の通りコロナの終息には至りませんでした。そして第二弾『風の又三郎』朗読リレーに続き、2021年4月からは月替わりで賢治先生の作品を紹介していくフェーズに入り、そのトップバッターに選んだのが『やまなし』でした。まだまだ、コロナが見えない恐怖として日常にあり、不安を感じながらの暮らしの中で、
－クラムボンがかぶかぶ笑ったよ
－ザッザザ、ザザァザ、ザザァザザァ
－堅雪かんこ、凍み雪しんこ。狐の子あ、嫁ほしい、ほしい。

－ひゆうひゆうひゆう、ひゅひゅ、降らすんだよ、飛ばすんだよ。

・・・などと声に出して物語に集中していると、ほんのいつとき、世の中とは違う軸で世界を感じることができ、どこかで賢治先生と繋がったようにも思え、そして安らぎました。

『銀河鉄道の夜』に始まり、今も続く月替わりの賢治コースと合わせると、朗読教室で賢治先生

の作品を取り扱うようになって今年で5年目を迎えます。3年目が半分過ぎた頃に岩手を旅して、宮沢賢治記念館へも立ち寄りました。そのとき、広い記念館の壁にずらっと見渡す限り展示された原稿の額を目にして、「賢治先生との朗読旅はまだまだ続けられる」と、未来にわくわくしたことを覚えています。

賢治先生が熱意をもって創作され、戦時中に原稿を防空壕へ持って逃げてくれた人がいて、今も、その価値を大切に守ってくれる人たちがいます。繋がれた言葉を声に出す度に、わたしたちの心の中が「すきとおったほんとうのたべもの」で満たされて、目の前のくらしが愛おしく変化していくことを強く感じずにはいられません。



賢治さんから聴こえる音、うた、ことばと「銀河ノコモリウタ」

歌手 kawole (カオル)



南米諸国に伝承されてきた歌や、日本の遊び歌、「お田植えうた」「機織りうた」のような仕事歌など受け継がれてゆくもの、語り継がれてゆくもの、「声とことば」を軸に活動している歌手です。

家族が忙しかったこともあり、子どもの頃からひとりで音楽を聴いて過ごすことが多く、クラシックピアノを入り口に10代の頃にはロックにはまり、近年は音楽そのものの根源に触れたくて南米を巡り、ペルー、ボリビア、アルゼンチンなど各地の先住民音楽家と交流してきました。旅では現地のみなさんの歌や音楽の中に生きる「自然や

精霊と人間の声」「体と声」「ことばの方向性や質」などの思想に触れ、人間が奏でる声や音が自然宇宙と深く密接に関係していると知ることになりました。「ことば」は大変身近なものですが、その中には実はとても不思議な「音」の世界が展開しているのではと歌を通して感じていたので、この旅によってそれがより鮮明になり確信に変わりました。

そんな中、学校の教科書で読んで以来遠ざかっていた賢治さんの世界に再び出会ったのは7年前。ある朗読の野外イベントに音楽担当で出演した際に、夕暮れの中で幻燈と共に始まった演目が「セロ弾きのゴーシュ」でした。

「何だと、僕がセロを弾けばみみずくや兎の病気が治ると。どういうわけだ。それは。」

なんという驚き。ああ、この人は知っていたのだ、純粹性を湛えた音が世界の不調和を癒すことを。

南米での体験が重なり合います。星空の下で人の声から物語を聴いたというのも大いにあるかもしれません。あらためて宮沢賢治という人が残したストーリーに潜む深遠な多次元的世界に驚き、その衝撃はこの後の自分の仕事を大きく変えるものになりました。長らく「歌う」ということをやっていましたが、本質的な何かを表現し、伝える方法として「朗読」という可能性があったこと、「ことば」はそもそも音楽的であったこと、活字を目で追っていた時には気づけなかった自然宇宙とのやりとりを、声と音を使って立体的に表出させることができると気づいたのです。

この出来事がきっかけで宮沢賢治作品を取り寄せては、難しいと放り投げていたさまざまな物語を再び声に出して読み始め、南米での教えになぞらえて近隣からの植物を森に見立てて音楽と朗読を体感してもらう「宮沢賢治朗読音楽会」を開催。中でもあまりにも有名な『注文の多い料理店』巻頭に添えられた「序」の美しさとまなざしは、100年前のものとは思えない輝きをたたえた賢治さん本人からの未来への呼びかけのように聞こえ、会の開催時には必ず朗読をするようになりました。

ところが2020年のコロナ・パンデミックによりあらゆる演奏活動は突如停止。社会全体の動向を静観する中で自然環境の急激な変化や人と人との関係性のあり方など大きな変容の波を見つめ直さざるを得なくなりました。

“すきとおったほんとうのたべもの”とは？

近くの山に登り、木を観察したり太陽や風を感じたり、賢治さんのしたように畑を耕し野菜やくだものを育てたりして過ごしているうちに、自然が織りなす「音」の豊かさと、人々の「声」を映し取り、音作品を作れないだろうか考えるようになりました。

こうして音の絵本「銀河ノコモリウタ」制作プロジェクトのビジョンが始まったのです。

2022年の1年間は、小さな録音機器を手に日本全国を旅しながら季節ごとの山の音や川のせせらぎを、小岩井農場では雪の岩手山を見ながら早春の鳥の囀りを、賢治さんも訪れたであろうイギリス海岸ではコハクチョウの群れに出会い、鳴き声をレコーディングしました。旅では同時に各地で56名に及ぶ皆さんの声をフィールドで録音、それぞれの場所の生活の音を背景に読み繋いでもらったのは「真空溶媒」です。

賢治さんが遺した思索メモ2「科学から信仰への小なる橋梁」の中に、世界と異世界は同じ「真空」を溶媒として発生するという地図のようなものがあり、「空（くう）」は何も存在しない、見えない世界なのではなく物理次元と干渉しながらつながり合っていると描かれています。

賢治さんが思い描いた理想郷イーハトーブを音の中になぞらえて「音の星座」を描けば、時空を超えて見えない世界で繋がる星図になるに違いない。

その後は朗読イベント共演の縁から詩人の管啓

次郎さんが「星と渡り鳥」を寄稿くださりご本人による朗読を収録、また連なり合うように柴田元幸さん、広島では詩人のアーサー・ビナードさんと出会い、鳥取ではたまたま立ち寄った旅館で「アザリア」を賢治さんと共に発行していた河本緑石のお孫さんである御舩秀さんに出会い、声を収録させていただくことになりました。賢治さんによる「音」を介した真空世界の導きなのではと思うような多くの奇跡的な出会いを重ねながら最終的に74名の人びとの声を集め、「うたとことば」「ことばとおと」からなる全長3メートルに及ぶじゃばら本、SOUND ART BOOK 銀河ノコモリウタが2022年の冬至に誕生することになりました。



結い

— 賢治が繋ぐ心と心 —

宮沢賢治の原稿は奥が深い

あるきみ屋主宰 森中秀樹

宮沢賢治の作品は酸素のようだと私は思っています。

自分で読んだり、聴いたり、観たりした記憶がなくても、賢治の作品をなぜか知っていたりしませんか。「注文の多い料理店」、「セロ弾きのゴーシュ」、「風の又三郎」、「銀河鉄道の夜」、「雨ニモマケズ」等々、

いつ読んだか、いつ聴いたか、いつ観たのか。おぼえていないけれど知っている。呼吸で酸素を体

に取り込む時にそれを意識しないのと同じように賢治の作品も意識することなく記憶している。

そんなところがまるで酸素のようだと思っています。おそらく、絵本、テレビや映画、プラネタリウムの番組などを通して、いつのまにか賢治の作品に触れているのでしょう。それだけ賢治の作品が世の中で広く親しまれてることなのかもしれません。

そんなことを考えたりしている私は北海道の釧路というところで本業の傍らに個人出版をしています。主に著作権の切れた作品に新たに描き下ろした挿絵を添えて出版したり、絶版で長く埋もれている作品の復刊なども手がけています。



今年に入ってから賢治の原稿（複製）から活字を起こした「銀河鉄道の夜」を作りました。原稿から活字を起こしたのは理由があります。既存のものを底本にすると、それを編集した編者の目を通して編まれた「銀河鉄道の夜」の複製を作ることになります。せっかくなら複製を作るより自分の目で賢治の原稿を確認して作りたい、そう思ったわけです。

原稿を見ると、いつも見ていた「一文字空白」というところも「なるほど、こうなっているのか」と自分の目で確認できますし、「ここは活字にするときにこうしたのか」とこれまで編集してきた方々の考えも見えてきます。そして、賢治の文字を追ってゆくことで発見もありました。それは青年と姉弟が登場するところで、活字では『女の子』となっているのですが、原稿では『めの子』と書かれていたことです。これは原稿を見ないとわからない発見でした。この『めの子』はおそらく「女（め）の子」ということなのでしょう。賢治の原稿を見て、活字だけではわからない奥深さを感じました。

この『めの子』について、なぜ賢治はその言葉を使ったのか、それが知りたくて関係書籍を調べてみましたが、その答えをみつけることができませんでした。

そのうち花巻に行く機会があったらこの『めの子』をなぜ使ったのか、記念館の方からその答えを聞いてみたいと思っています。



わたしの「押し活」

公務員 遠藤麻美子



私は、宮沢賢治さんが大好きです。しかし、そのことに気がついたのが、ここ最近…。本当に些細なきっかけで、急激にのめりこみ始めました。

今から4年前。新しいスマートフォンと共に購入したのが、星空をモチーフにしたスマホケースでした。とても気に入りはばらく眺めていると、ふと「そういえば、『銀河鉄道の夜』を今まできちんと読んだことがないなあ。」と思いつきました。じっくり読む時間がなかったので、YouTubeの朗読を聞きながら家の掃除を始めましたが、お話の世界があまりに美しく、すっかり心を奪われてしまった私。「宮沢賢治ってどんな人だったんだろう。」気がつくと、Amazonで賢治さん関連の本を何冊も購入したり、花巻に賢治さんの情報を集めに通いつめたりするようになりました。ある日、イーハトーブ館の方に「いつもいらっしゃっていますよね。」と声をかけられて驚きました。私は毎週のようにイーハトーブ館へ出役していたのです。「我を忘れてしまうほど、こんなにものめりこんでしまうなんて…。今どきの表現で言うところの『沼る』？『押し活』？」普段、多くの人と関わって仕事をし、休みの日も仕事のことが頭から離れず、疲弊した私にとって、賢治さんのことを追いかける日々は「心の癒し」であり「元気の源」となりました。

賢治さんの本や資料を読んでいく中で、驚きや発見がたくさんありました。それは、私の生まれ育った町が賢治さんと深い関わりのある場所だということです。学校帰り、毎日のように遊びに行った川や公園は、賢治さんの作品に出てくる場所でした。友だちと買い物を楽しんだ商店街には、その昔賢治さんや盛岡高等農林学校の皆さんが足しげく通った「カフェー」や「写真館」がありました。かつて賢治さんが森佐一さんと共に歩いたとの記述がある「杉土手」は、私の実家のすぐ近く…。母校の中学校のそばに架かる橋のたもとには、賢治さんの歌碑やゆかりの井戸が…。祖母の名前は「トシ」で、うちのトシさんが幼い私に「困った時に唱えなさい。」と、毎日のように教えてく

れたのが「南妙法蓮華經」。賢治さんのゆかりの地を巡ったり、賢治さんのことを調べたりすることは、私自身の幼いころの記憶をたどることと重なり、うれしくて涙が出ます。何で、もっと早く賢治さんの魅力に気がつかなかったんだろう。いや、あの日、ぼんやりとスマホケースを眺めていた私に、賢治さんが「よかったら推してみませんか？」とメッセージを送ってくれたのかもしれない。そんな妄想を展開させては、キャーキャーしている私。まぎれもなく私の一番の「推し」は、「宮沢賢治」であり、永遠にときめき続けるのだと思います。

..

■「賢治の世界」セミナー 2024



令和6年度で14年目となる「賢治の世界」セミナーを、花巻市内の小・中学校、高校を会場に開催しています。花巻東高等学校では、『「おなかを満たすこと」と「心を満たすこと」—どちらを選ぶ？ 宮沢賢治の幸福論』をテーマに講話をしていただきました。今回は地域の課題を考え、自分の得意なことで解決することを考えていく「探求学習」の一環として、特別進学コースの1年生から3年生43名の生徒たちが取り組みました。講師は東京都在住の独立研究者・編集者の岡田基生さんです。岡田さんは、宮沢賢治を「よりよい社会の実現を目指した思想家」としてとらえ、文学にとどまらない多様な活動から、現代の私たちにも活きる考えを探る研究をなさっています。「宮沢賢治は現代でいうところの、社会起業家、コミュニティ・デザイナー、マルチメディア・アーティストだった」という紹介は、「詩人・童話作家」というイメージで知られている視点とは全く違うも



▲蟻の視点からのおきなぐさ（ポランの広場にて）

.

のを感じました。「おなかと心」両方を満たすために、賢治さんは「広場」を作ったことを、「ポラーノの広場」という作品の切り口から紹介します。そして、「羅須地人協会」を作り、農業指導、不用品の交換会、演劇やレコード鑑賞会などを実践したということです。スマートフォンひとつあれば不自由しない世の中ですが、SNSやネットニュースを見続けてしまうことは現代の特長とも言えます。そこで、「宮沢賢治ならどうするか」という考え方で、賢治さんの生き方や作品から、課題解決の様々なヒントを見出していくというお話でした。今回のセミナーで、宮沢賢治に対する新鮮な印象を持った生徒も多かったのではないのでしょうか。

■「賢治の世界」ワークショップ 2024

5/25(土)『春と修羅』100年

小岩井農場を訪ねて in 雫石町



大人気の回で、20名の方が参加しました。「小岩井農場」は『心象スケッチ 春と修羅』に収め

られています。102年前の5月21日という日付をもち、宮沢賢治が小岩井駅で下車し、鞍掛山の方向をめざして小岩井農場を歩いていくという体験をもとに創作された作品です。小岩井農場の施設は、100年以上経った今でも現役で使われています。ガイドの高山勉さんは、当時のものを残し守っていくことが大切なことだとお話してくださいました。

6/15(土) 賢治のあしあと散歩

～稗貫農学校跡地からイギリス海岸へ～

「イギリス海岸」とは北上川と猿ヶ石川との合流地点のことで、宮沢賢治が命名しました。夏に干上がると岩は乾き青白く見え、その様子がイギリスドーバー海峡の白亜の海岸に例えられたそうです。今回のワークショップには、10名の方が参加。賢治さんが教鞭をとった「稗貫農学校」の跡地から、岩手軽便鉄道が当時どこを通っていたか、また時の流れで変わった場所などを、当館の牛崎学芸員の解説とともにイギリス海岸まで歩きました。連日暑さが続き雨も少なかったため、川底が自然に露出してイギリス海岸を観察することができました。



7/6(土) 初夏の胡四王山散策

宮沢賢治記念館がある胡四王山は、賢治さんが歩いた山としても知られ、作品に登場する植物や動物も生息しています。この日は、市内外から17名の方が参加しました。

野鳥を警戒させないように静かに歩き、クロツグミ、キビタキ、サンコウチョウの美しい声に耳を傾けました。数々の樹木についての説明もあり、昔と



比べ人々の生活は変わり、それによって山の様子も変わってきたという話がありました。実際に山を歩きながら学ぶことで、それぞれ感じたことがあったことと思います。

《特別展》のお知らせ

◆特別展「刊行100周年 二冊の初版本」

期間：令和6年8月10日(土)

～令和7年2月9日(日)

会場：特別展示室

今年度は宮沢賢治が生前に刊行した『心象スケッチ 春と修羅』と『イーハトブ童話 注文の多い料理店』の二冊の本が100年を迎えることを記念し、二冊の本にかけた賢治の作品に対する熱い思いを取り上げます。初版本や直筆稿のほか、刊行の際に作成された広告やチラシ、絵画といった貴重な資料の展示を行います。



直筆稿&実物資料公開期間：

- ①令和6年8月10日(土)～18日(日)
- ②令和6年9月14日(土)～23日(月・祝)
- ③令和6年10月26日(土)～11月4日(月・祝)
- ④令和7年2月1日(土)～9日(日)

◆特別展「紫紺染について」

期間：令和7年2月22日(土)～5月6日(火・祝)

「紫紺染について」は、盛岡の特産物「紫紺染」を復興させようと工芸学校の先生や町の紫紺染め研究会の人たちが相談をして、かつて紫紺を取り扱っていたといわれている山男から製法を聞き出すというお話です。直筆稿のほか、成立過程を示す資料などから作品の魅力に迫ります。

* 編集後記 *

宮沢賢治作品を自分の人生や活動に活かすこと。今回の寄稿者の皆さまはそれを明確に持っていらっしゃいます。作品を読むだけにとどまらず、考え、感じ、それを実行に移すということ。もし賢治さんが見ていたら、「よくぞそこまでよくやってくれた」と大喜びしていると思います。自然の中を歩いてみたり、声に出して読んでみたり、歌ってみたり。難しいことではなくても、何か自分でやることで楽しくなることができれば素敵だと思います。

(Y.S)